The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	20世紀初頭の英国における輸出用キモノの流通と日英業者の相互交渉について
Author(s)	サワシュ, 晃子
Citation	デザイン理論. 2015, 66, p. 74-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56356
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

20世紀初頭の英国における輸出用キモノの流通と日英業者の相互交渉について

サワシュ晃子／大阪大学大学院文学研究科博士後期課程，日本学術振興会特別研究員

本発表は，20世紀初頭に海外市場向けに製作された日本製輸出用キモノについて，誰がそれを製作し，どのように英国にもたらされ，英国内でどのような形で販売され，一般の消費者の手に渡ったのかを，日英双方の資料を比較することで明らかにするものである。

当時日本の最大の貿易相手国であった英国には，キモノを含む大量の日本製輸出工芸品が渡っており，その影響はフランスと比べても意義深いものであった。しかしながら，とりわけ同時代の英国のファッションに大きな影響を与えたキモノについては，19世紀末までを対象とする研究の中で捉えられるにとどまってきた。そのため，英国内でキモノ販売が拡大し，キモノが一部のコレクターだけでなく，一般にまで浸透した20世紀初頭の大流行とその影響については見落とされている。とはいえ，東洋製品販売の大手 Liberty 商会による20世紀初頭のキモノ販売はよく知られている。また，先行研究で一部の現存品やその欧米での人気が紹介されたり，キモノを着た女性表象が扱われたりすることはあった。しかし，このように断片的には言及されてきたものの，それらがどのように流通し，そこに誰がどう関わっていたのかという問題に関しては，ほとんど明らかになっていない。近年，林忠正や執行弘道，起立工商会社や山中商会といった，日本の絵画などの美術品や陶磁器などの工芸品を輸出した美術商の活動に関する議論がなされ始めている。しかし，同じように刺繍製品や絹製品を製作・輸出した高島屋などの，キモノ輸出の重要性は全く見落とされてきたと言っていい。本発表では，英国ファッション産業におけるキモノの広がりとその流通経路を明らかにするとともに，英国内での流行の時期と地理的範囲，またどのような階層の人々が流行の中心となったのかを，英国内に現存する文献資料と現物資料の両方を参照しながら明らかにする。同時に，その流通・消費の過程で，現地の需要に合わせてそれらがどのように変化していったかという問題を検証することで，それら輸出用キモノの製作年代を特定する方法を提案したい。さらに，同時代の現地のファッションがキモノの流行からどのような影響を受けたのかも合わせて考察する。それによって，20世紀のキモノブームのもつ意味と，その中で日英の業者が果たした役割の一端が浮き彫りになるだろう。

20世紀初頭の英国において，キモノの販売はすでに先の Liberty 商会だけでなく，大小の東洋製品専門店から様々な百貨店にまで広がっていた。例えば，大手百貨店の一つ，Harrods では Oriental Department が開設され，家具や陶器，衣料品などを含む様々な日本製品が販売されていたが，20世紀に入ると日本製のキモノが継続的にカタログに掲載されるようになる。すぐに目次にも Kimonos との項目が立てられたことからも，それらが人気商品であったことがわかる。このように，一般の人々がキモノを容易に入手できるようになったのは20世紀に入ってからのことであるが，このことが英国でファッションのジャポニスムを一般レベルにまで浸透させることとなったのは間違いない。とりわけ Harrods は店頭販売だけでなく，通信販売も行ってい

たため，それら両方を通じて，キモノが英国全土の家庭にもたらされ，さらなる流行拡大を促進したと推測できる。このように，英国におけるキモノブームは，現地の商店・百貨店での大々的な販売が背景となったものであった。

これら輸出用キモノを販売した店の多くは，ロンドン随一の富裕なショッピングエリアに集中している。そして，これらの店の購買層は，20世紀の消費の中心的担い手でもあった，ミドルクラスを中心とする新興の富裕層であった。つまり，キモノは高級品の類いであり，富裕層をターゲットにしたメディアや販売店を含むサークルの中で消費されたといえる。英国のキモノブームは，20世紀にミドルクラスを中心とする人々によって支えられ，拡大していったと推測できよう。

この輸出用キモノの製作・輸出を行った業者の中でも重要なものの一つが，世紀転換期にロンドンに進出し，日英博覧会への参加などを通じて販路を拡大した高島屋であろう。高島屋の海外事業は，英国では，ロンドンに代理店を置いての絹製品貿易を経て，独立の出張所を設けるまでに成長した。その高島屋に残されている輸出用キモノの図案集『外人向着物図案』への書き込みによると「シングルトン商会」から注文を受けていたことがわかる。これは，日英両国の店舗間で，直輸出を行っていた英国の東洋製品専門店 Singleton Benda & Co. のことだと推測され，高島屋の「外人向着物」は，この Singleton Benda & Co. によって英国内で販売された可能性が非常に高い。

この高島屋の『外人向着物図案』には131枚の図案が収録されており，それを濃淡関係と明暗関係を基準に分類すると，多くがペールカラーと呼ばれる淡く明るい色で占められていることがわかる。これは高島屋に限った傾向ではなく，また同時代の日本の流行色とは全く違ったものであり，優れて海外向けの色選びであったといえよう。そして，このような色選びは，1909年あたりに出された英国側の要請によるものであった。輸出用キモノが流行した20世紀初頭の室内装飾には，それまでの重く暗い色に代わって，明るく柔らかな色が好んで用いられるようになっていた。輸出用キモノは英国では主に室内着として用いられていたことから，薄い色が求められたのは，当時の明るく柔らかな室内の雰囲気に合わせるためだった可能性が高い。これまでの調査で，英国内の美術館・博物館に収蔵されている輸出用キモノの実例を多く発掘してきたが，それらに使われている色を参考にすることで，製作年代の特定に役立てることができよう。

一方，これら輸出用キモノの流行は，同時代の現地のファッションにも大きな影響を与えている。ミドルクラス以上の女性を読者対象としたファッション新聞 *Queen* を見ると，とりわけ1907年と，1911年～1913年の二つの期間にキモノ風ファッションの記事が多数見られる。20世紀に入ると，フランスの影響によって，英国でもキモノがファッショナブルなものだと捉えられるようになっていた。特に1907年に入ると，kimono という語の使用が著しく増加し，「キモノからインスパイアされた」という，直線的で，ゆったりしたシルエットのコートやドレスの記事が紙面を占めるようになった。

このように，キモノは色やモチーフといった表層的な影響にとどまらず，より原理的な衣服の構造を変化させたという点で，20世紀におけるジャポニスムの大きな転換点である。その影響源であると考えられる輸出用キモノの流行は，日英双方の業者の相互交渉の賜物であったといえるだろう。